

深夜の酒宴

映画文学人生論

原作：椎名麟三 (1947) 「展望」

参考：『煙突の見える場所』 (1952)

監督：五所平之助 原作：椎名麟三 『無邪気な人々』

出演：緒方隆吉 上原謙 脚本：小国英雄

緒方弘子 田中絹代 撮影：三浦光雄

参考 『美しい女』 (1955) 「中央公論」 音楽：芥川也寸志

全く僕が飢えていることがそれほど重要なことだろうか

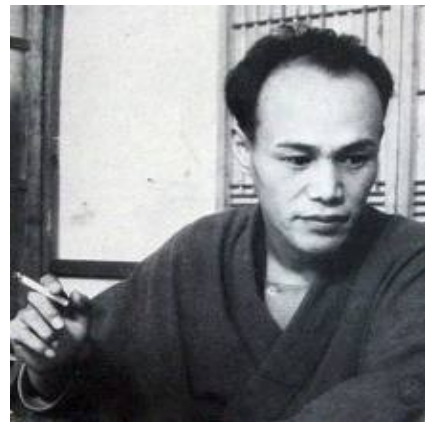
椎名麟三の『深夜の酒宴』が発表されたのは終戦直後の昭和二十一年だが、私をはじめて読んだのはそれから約十年後の昭和三十年代初期だ。

たまたま空きっ腹のときに読んだせいか、「全く僕が飢えていることがそれほど重要なことだろうか」という主人公の問いかけには苦笑させられた。飢えはその時の私にとっても切実な問題ではあったが、世間の人々からみれば、たいした問題ではなかった。

しかも、私がこの小説を読んだ頃は、米軍の飛行機による空襲で焦土と化した日本の景気がいくらかよくなって、もはや戦後ではないと言われていた頃である。この小説で描かれている主人公の空腹は私の経験した空腹では理解できない。

主人公の須卷は露天の売り子をして、売上げの一分を月給としてもらう。月に百五十円から三百円になるが、もちろんそれでは食えないからいつも飢えている。取引先の間屋の主人が米を一升くれたので、それでやっと凌ぎをつけてきたが、もうその米もない。

それから四、五日間、雨が降り続き、須卷は一日から殆ど何も食べていなかった。昨夜からひどい飢餓感に苦しめられていた。飢えはまことに重い。それは全身へ鉛のように蔽いかぶさってくるので、動くのも大儀なのだ。



深夜の酒宴

映画文学人生論

アパートの壁にもたれていると、すき焼きの匂いが部屋へ流れ込んできた。飢えて弱っている主人公の胃は反作用を起こし、嘔吐を催した。

「どうなさいましたの」。加代という二十歳の太った女が向かいの部屋から出てきた。「つまり胃が……。ねえ、判るでしょう？ 胃が駄目になったということが」 「判りますわ。わたしのところに医学生の方の持って来て下さったいいお薬がありますから……。」「いや少しもあなたは判っていない。放っておいてください」。

主人公は部屋の入口で気を失った。それ以来、度々加代から粥を恵まれている。加代は甘えた柔らかな口調で話すので、一層白痴のような感じがした。その彼女には強い倫理性のようなものがまるで感じられないのだ。彼女はただ現実に押し流されているだけなのである。

彼女だけではない。アパートの住人たちはみんな現実に押し流されていた。手脚が骨ばかりで、腹だけが異様にふくれている十二歳の少年は栄養失調で死んだ。苦しそうな痙攣的な咳をする右隣の部屋の主婦も死んだ。その夫は姿を消し、葬式がすむまで帰ってこなかった。左隣の戸田という男は共産主義の世の中になれば、怠け者が重い懲役になることを心配している。体が弱っている須巻は加代の部屋での深夜の酒宴で酔いつぶれた。

現在は堪えがたいからといって、希望のない者には改善など思いがけないことです。椎名麟三